

# 名人・達人 評判倶楽部 THE GREATEST PEOPLE

生命の尊さと自然の生命力に  
惹かれます。

## PROFILE

### 山本 金一

(株)山本建材会長、当協会理事を務める。  
生まれ/大正13年11月 愛知県西春日井郡  
血液型/O型  
信条/立志  
夢/繁栄  
好きな言葉/臥薪嘗胆  
嫌いなこと/環境破壊



KINICHI YAMAMOTO

TV、ラジオの医療番組のインタビュアーを経験し、現在、愛知県衛生部の審議会委員としてホスピス（ガン末期などの患者が安らかに死を迎えられるように、心理的・社会的・宗教的な援助を行う医療施設）問題を研究する花井さん。現れた山本さんに原稿の束を渡されてビックリ。そこにはホスピス問題、ガン告知、インフォームド・コンセント（患者が病気の治療を受ける際に、医師からその内容や目的、効果についてよく説明をしてもらい、それに同意した上で治療を受けること）などに関するコメントがびっしり……。さて、インタビューはいかに。

生死の境をさまよって、  
生きること、生き抜くこと、  
人間として立派に逝くことの  
大切さを学びました。

——（渡された原稿を見つめつつ）ひゃあ、これは！いま私が勉強していることばかりです。（しばらく読んで）山本さんは建材、建設といったことがご職業ですよね。まったく分野が違う医療の問題をかなり詳しくお知りになっていらっしゃいますが、何がきっかけでこの問題に興味をもたれるようになったんですか。

山本会長（以下山本に略）『自分が病気をやったことですねえ。心臓病を患って生死の境をさまよいました。でも現代の医療によって助けられて、こうして生きているわけですから、有り難いことですねえ。このことをきっかけに、これから高齢化社会を現代人はどう生きていくのか、医療現場での看護婦さんの労働条件の問題、とりわけ看護婦さんの労働は大変ハードなわけですが果して報われているといえるかなど、いろんなことを考えるようになりました。』

——この原稿にはホスピスの必要性と、ホスピスが“姥捨山”的存在になってはいけない、と書かれてらっしゃいますね。

山本『人生の終末を人間らしく迎えるには、これからどうしても必要ですよ。しかしね、ホスピスできて、そこへ誰も彼も死を間近かに控えた病人を、姥捨山のようにポンポン放り込んではおだめですねえ。



そこでいま必要なのは、死に対する倫理教育、準備教育です。逝く方も送る方も死に対する認識を正しく持っていないと、こうした危険性が起きてきますからねえ。だから、直接死と対峙していない若い世代のうちからやるべきなんです。』

——ホントにそうですね。ガンの告知の問題にしても日本人の場合は、死に対する準備教育のなさが悲劇に結びつくケースが……（ひとしきり終末医療の話に熱中）。ところで、かなり医療の現場を鋭く観察していらっしゃいますが、入院は長かったんじや



ないですか。

山本『長いです。一度悪くなったものは、なかなか元通りにはなりません。いまは食事などいろいろ気をつけています。昔は浴びるように酒を飲んでたけどね。何事も適当でないといかんね。酒は“百薬の長”というが、程度を超えると毒にもなる。毒にしちゃいかんねえ。』

— かなり実感ももってますね。大変な酒豪でいらしたようですね。

山本『なぜ、それも飲むかという、事業をしているといい時ばかりじゃない。いまなんかも不況で、仕事量が少ない、経営も難しい。また反対にあり過ぎて困る。人がいない、やれない、これもつらい。いまちょうど賞与の時期だが、各部課長が出した査定表で社員の評価をしなくちゃいけない。後で“少なかったから、あとこれだけ増額しよう”なんてできませんから。あれこれ頭痛いことばかりですよ。そうすると……。』(インタビューは12月に行われました)

— 来ましたね (笑)。

山本『そう、つついとお酒を一杯、二杯といただくことになる。』

— でもね、そこまでトップに考えていただいているというのは、社員の方にとって幸せなことだと思いますね。

山本『たった千円の差をつけるにも悩み、眠れなくなる。そういうことの積み重ねがたまって、酒を飲むということになっちゃうんだね。』

— それがジワジワと心臓へきて、ダウンとなったわけですね。ある意味では、経営者病ともいえますね。

山本『倒れちゃ何にもなりません。やはり健康が第一と、医療についていろいろ考えるようになった。こういうことです。』

— 山本さんは人一倍真剣にお仕事に取り組まれる方ですね。でも、仕事だけに猪突猛進して来たわけではないな、とお話を伺っていると感じるのですが。

山本『そう、いろいろやったけどね。僕という人間の性質かもしれないが、お金の儲からないことはなかなか続かないんです。カラオケも結構好きで、覚えた歌を披露して拍手をしていただく確かに嬉しいけど、でもそれだけですし…… (笑)。』

— 手をたたいてもらったり、ほめられたりするのも精神的報酬だと思いますが、それだけではだめだと (笑)。

山本『拍手だけでは上達にも限りがあるわね。まあ、それ以上望むならプロにならんといかんが。』

ここでは見られない、  
自然の美しさに惹かれます。

— そうですね。お金をもらえるのがプロですからね。ところで、いきなり話が変わりますが、さっき会社の2階にモノクロの素晴らしい写真が飾ってありましたが、もしかして山本さんが撮られたのでは？

山本『ラウスの写真ね、私が撮ったヤツです。』

— 川べりの木の枝に雪が凍りついたような、とてもきれいな写真ですね。

山本『私は景色の撮影が好きで、夜中でも飛んでいくこともある。でもプロじゃないから、これもお金にならない。』

— しようとしなない？

山本『飾っておくだけ。一度ほめてもらったらおしまい(笑)。この間は、青森県の八甲田山を撮ってきました。落葉して枝だけになった木に、雪が積もって凍る。木の花、雪の花です。この辺にはない、景色を撮るのがいいんですな。』

— お一人で行かれるんですか、写真旅行は。

山本『互いの写真を批評し合ったりする仲間がおりますので、いっしょに行くんですよ。』

— 私は写真を見る方が大好きなんですが、一点づつ見るよりもまとまった作品を個展なんかで見るのに興味があります。ずっと見てると、写真を通してその人のクセだとか着眼点、感性“人となり”が見えてくるような、そんな気がして面白いんですよ。

山本『私もね、自分の作品をずらっと並べて見ることがあるが、何年も前から同じような景色を撮ってることに気がつくんだね。自然とそんな風景ばかり撮ってきた。木の葉っぱから雨露が落ちていく寸前のキラリと光るところとか。あ、ここでもあそこ

でも撮ってるなんてね。自分の嗜好や作風はこういうところなのかなあとったりしますよ。』

— 人によっては好きな地形とか、場所だとかにこだわりが大きいようですが、山本さんはどんなところが好きですか。

山本『高い所が好きですなあ。高い所から望み見て、素晴らしい景観が見えたりすると気分がいいですね。この辺では見られない自然の美しさに惹かれますね。』

— 心を惹きつけて放さない一番好きな景色とはどこでしょう。

山本『(即座に) 屋久島です。あそこの杉は、何千年という年月を経ていまお生き生きといているんですな。木の肌というか皮が瑞々しくて、生命の偉大さを感じさせてくれる。そういう木が大きく高くそびえたって、あちこちにあって圧倒されますねえ。迫力が全然違う。まさに国破山河在ですな。』

— そこで気に入った写真は撮れましたか。

山本『いやあ、気に入るところまではなかなか。生あるものはやがて老いて死んでいくものですが、あの屋久杉だけは永遠の生命力があるようで、感動しましたね。』

— 先程、八甲田山のお話が出ましたが、いかがでしたか。私は映画の「雪の八甲田山」のイメージがあるんですが。

山本『八甲田山も美しくてよかったが、十和田湖の景色が本当に素晴らしかった。ここは紅葉の頃が一番いいと言われるが、私は紅葉の後の方が一番だと思うね。すべて葉をなくした木の素晴らしさ。これから冬を迎え、また春に緑豊かに葉を繁らせようという生命力が伝わってくる。また、



## INTERVIEWER

花井 美紀

(株) コミュニケーションデザイン代表  
イベント司会・コーディネーター、  
ビジネスマナーインストラクター、  
信用金庫協会女子職員講座の専任講師、  
TV、ラジオ等で現在活躍中。



夕方に沈む太陽の中、湖に霧が立ちこめて景色全体が浮いているように見える。こりゃ絶景だなと思いましたね。』

— う〜ん、山本さんを魅了して放さないのは自然の持つ力強い生命力というか、まさに飾らない自然体の美、すべての原点としての美なんでしょうね。落葉した木にうらぶれたイメージなど決して持たれないんですね。何か創業者精神につながる部分があるように思います。いまは会長になられて、時間的余裕が以前よりもできたと思いますが、これからはどんなことに熱中なさりたいですか。

山本『やっぱり美しい景色を見て、撮ることですな。誰も行かないような所もいいね。日本をもっともっと知り、じっくり見てみたいね。例えば京都の寺院とか。狭い道を分け入って、ゆっくり、いつまでも飽きることなく景色を堪能する。何よりも落ち着くんじゃないかな。』

— 意外ですねえ、京都とは。もっととんでもない所をおっしゃるのではと思ってました。八甲田山、十和田湖の雪の花、ラウスときて京都ですか。でも

「戻って来たんだな」という感じがしましたね。

山本『(笑)。そうかも知れんなあ。八甲田山は八甲田山でいいところはあるし、京都は京都でまた違う味がある。京の名所も写真の撮り方ひとつで全然別の景色に見えるしね。どこを中心に撮るかですよ。畦道の小さな花でも工夫して撮って、大きく引き伸すと、もうまったく違う別の風景があるんです。』

— なるほど。撮り手の感性と技術しだいなんですね。一度、個展を開かれてはいかがですか。

山本『うん、まあ機会があったらね……。』

— 会社に飾ってある写真はラウス一枚だけなんですか。

山本『そう、あれ一枚。あんまり飾るとねえ……。』  
— あらあ、山本さんって意外とシャイな方なんですな(笑)。では最後に、シャッターを押すまでの楽しみ、現像して上がってくるまでの楽しみ。どんな気分なんですか。

山本『ワクワクしますねえ(笑)。』

(この後、政治の話、コメの話、医療の話と予定時間をオーバーして大いに盛り上がる)

